

2020 0526

「8時だヨ!全員集合」の幕開けは、ワクワク感あふれるご機嫌なマーチに導かれた。トランペットの「ドドミソソラドソ」という人懐っこい旋律が観客の手拍子をごく自然に促し、「ほら、こっちだよ!」と誰しもを分け隔てなく、音楽の愉悅へと手招きする。こんな音楽を書くことができたのは山本直純(1932～2002)をおいて他になかった。

早熟の天才だった。東京芸大作曲科(のち指揮科に転向)で学ぶ一方、放送局などの現場に入り浸り、映画界や草創期のテレビ界の寵児に。その名は、映画「男はつらいよ」の名主題歌とともに多くの人の心に刻まれている。

ようこそ 山本直純の世界へ



指揮をする山本直純。コメディアン張りの語り口と風貌で人気を集めたが、音楽的な表現力は群を抜いていた。＝ミリオンコンサート提供

「あの太振り、みんな、ただの体操だと思ってるでしょ。でもね、あの腕の振り幅で大勢を束ねるには、実はすごい技術がある。それをあんな何でもないような顔をしてやってしまうんだから、直純はすごい。僕にはムリだな」

敬称略(編集委員・吉田純子)

「晴れやかな長調で泣かさないかん」が持論。NHK大河ドラマ「武田信玄」の壮麗なサウンドから、ドリフの先輩格である「ハナ肇とクレージーキャッツ」の軽妙な「学生節」、「歌えパンパ」

「晴れやかな長調で泣かさないかん」が持論。NHK大河ドラマ「武田信玄」の壮麗なサウンドから、ドリフの先輩格である「ハナ肇とクレージーキャッツ」の軽妙な「学生節」、「歌えパンパ」

出し、会場を沸かせるためのBGMとして書いたものだった。指揮者としても一流の腕を持っていた山本は、小澤征爾(84)の最初の師であり、生涯最良の友でもあった。60年代後半、チョコレートのCMで「大きいことはいいととだ」と歌いながら気球に乗って指揮していた姿について、小澤はこう振り返ったことがある。

ドリフの時代、その音楽

②

ご機嫌マーチ 会場沸いたタクト



公開番組「進め!ドリフターズ」から。この翌年から「8時だヨ!全員集合」がスタートする＝1968年、東京・江戸川公会堂

あの時代の土曜夜8時は、日本中の子供たちにとって、1週間待ちに待った祝祭の時だった。

「8時だよ!」。いかりや長介の号令に、観客の子供たちが「全員集合!」と元気よく応じる。法被姿のメンバー4人が客席の通路を走り抜け、舞台へ駆け上がる。全編、生放送。会場の子供たちとテレビの前の子供たちのワクワクが、ひとつになる瞬間だった。

舞台上には指揮者とビッグバンド。ザ・ドリフターズの5人とゲスト歌手がそろると、いかりやの「行ってみよう!」のかけ声に添えてトランペットのご機嫌なイントロがはじけ、北海道の民謡「北海盆唄」が始まる。会場は「エン

ヤーコラヤ」の合唱に。

「8時だヨ!全員集合」(TBS系)が始まる前年には、萩本欽一と坂上二郎という人気コンビによる「コント55号の世界は笑う」(フジテレビ系)がスタート、瞬発力のあるアドリブで爆笑をさらっていた。しかし「全員集合」の猛追はすさまじく、ほどなくその視聴率は他局を圧倒してゆく。

「『全員集合』は響きやリズムの宝庫。様々な国や時代の音楽が幼心にすり込まれた。あらゆる音楽を偏見なく聴く姿勢を育ててくれた『音楽学校』だった」。クラシックを軸に、ポップスやヘビメタも自在に論評する音楽評論家の矢澤孝樹(51)は振り返る。最先端

の洋楽、歌舞伎、民謡、童謡、クラシックに至るまでふんだんにまぶした「全員集合」は、多感な子供たちの心を、多様な音楽の世界へとぐっと引き寄せてゆく。

◇

1969年10月4日にスタートした「8時だヨ!全員集合」は、途中で約半年間の休止を挟み、85年9月28日まで続いた。16年間、計803回。最高視聴率50・5%の「お化け番組」は、多くの子供たちにとって、世界の音楽への窓でもあった。一流の音楽と大衆文化が垣根をつくらず、ともに豊かな笑いを紡いでいた「8時だヨ!全員集合」の時代を振り返る。

(編集委員・吉田純子)全12回

ドリフの時代、その音楽

①/12

世界中の響き伝えた「全員集合」

「8時だヨ！全員集合」の打ち合わせは毎週木曜に始まった。

いかりや長介を中心に、ディレクターや構成作家、舞台美術担当が顔を合わせる。ドリフの初期メンバーだった荒井注（1928～2000）のマネジャー、網井雄三（74）はその時のあまりにも張り詰めた空気が忘れられない。

「いつ行っても声をかけられない雰囲気。それくらい誰もが妥協せず、1回1回到本気だった」

番組前半の、ドリフ全員がそろそろ大がかりなコントがメインとなる。ゲスト歌手の歌を挟み、小さなコントがそれに続く。音楽担当の仕事は、コントが終わるたびに流れる「オチ音」の作曲や楽曲の

「モーツァルトか直純か」



落語家の古今亭志ん朝（右）とステージの打ち合わせをする山本直純。笑いの勘所も抜群だった。1967年、小尾旭氏撮影

アレンジなど多岐にわたった。

山本直純と助手たちも、最初は木曜に顔を出していたが、翌日までの内容が決まらないことが多かったため、金曜から現場に合流することが多くなった。ほぼ1日ですべての曲を作・編曲し、譜面をバンドに渡していたことになる。

そうした極限の現場で、指揮者の小澤征爾や岩城宏之といった盟友が語った数々の「ナオズミ伝説」が、次々と証明されていく。

どんな楽譜でも隅々まで頭に入っている。奏者全員の音が完全に同時にきこえる。楽員のどんな些細なミスも瞬時に指摘する――。

「11、15秒くらい書いてください」「11は5秒削って」。現

場からのどんな依頼にも涼しい顔で応え、山本は五線譜に鉛筆を走らせる。頭の中にある音を写しとっているとしたか思えない速度に、助手たちは「モーツァルトか直純先生か」とささやきあった。

当時の放送界や映画界は、アカデミックな素養のある若手作曲家を積極的に登用し、若手もまた移り気な大衆の感性に採られつつ新たな時代の表現を模索していた。芸術と娯楽が手を取り合って、文化を成熟させてゆく。そんな時代の寵児だった山本を得たことで、「全員集合」は独自のグルーブを携え、かつてないお笑いのムーブメントを現出させてゆく。

敬称略（編集委員・吉田純子）

「8時だヨ！全員集合」が予想以上のスピードで軌道に乗る一方で、音楽の責任者である山本直純は多忙を極めていた。助手の青山勇（78）は「寝る時間なんてなかった。寅さんもあったし、モーニングショーの仕事も。移動中の車の後部座席でアレンジを手伝うことも多かった」と振り返る。

1970年以降の山本は、相変わらず映画や放送、CMなどの仕事を膨大に引き受けつつ、新しい夢への助走も始めていた。日本に本格的なオーケストラ文化を根付かせるという夢である。72年、小澤征爾と「自主独立」をうたう新

日本フィルハーモニー交響楽団を結成。同年秋からは音楽番組「オ

番組サウンドの継承



1972～83年に放送された「オーケストラがやって来た」（TBS系）から。小澤征爾がしばしば凱旋（がいせん）出演した。左からアイザック・スターン、小澤、山本直純＝1974年、テレビマンユニオン提供

「オーケストラがやって来た」（TBS系）の企画構成の一切を担い、「オーケストラは市民のもの」という理念を全国に広めてゆく。

しかし、内容の変更が頻繁に起こる「全員集合」の現場は、なかなか離れることができない。山本は、東京芸大作曲科の後輩だった助手のたかし（あきひこ）（1943～2016）に番組の音楽の一切を任せることを決める。それから85年に番組が終了するまで、たかしは山本が開拓した「全員集合」の音の風景を守り、自身もまたサウンドメーカーとしての天賦の才を存分に花開かせてゆく。

大学時代のたかしは、後輩の加古隆（73）に「山本直純さんが目

標」としばしば憧れを語っていた。ともにモダンジャズに傾倒。権威的な芸術に閉じこもるのではなく、自分の心に正直に、より広い世界で人々と音楽でつながる道を、それぞれに模索していた。

たかしは卒業を待たず、山本に弟子入りする。「放送局から放送局に移動する間に、車の中ではずっと基本的なところを直純先生が書いて僕が肉付けするんだ。大変だよ」。卒業後、加古にそう語る声はかつてなく弾んでいた。

加古もまたパリ留学を経て、NHKの「映像の世紀」のテーマ曲など、多くの人々の心に深く刻まれる楽曲を量産することになる。

敬称略（編集委員・吉田純子）

「『8時だヨ!全員集合』は音楽番組でした」。当時、制作現場の中枢にいた放送作家の原すむ(69)はそう言い切る。山本直純と、その後継を託されたたかしまあきひこの一流のサウンドに支えられていたからこそ、「全員集合」の笑いははじけたのだと。

「全員集合」での山本の代表作がオープニングのマーチだとすれば、たかしまの代表作は舞台転換の間にコントと歌の橋渡しをする、にぎやかな祭り囃子調の「盆回り」だろう。「もともとチャンバラコントの立ち回りのために書いたものだったので、ちょっと和風に、日本の陰旋法になっているんです」とたかしまは生前、記者

たかしまの「盆回り」



自宅で仕事をするたかしまあきひこ。金曜の夜に台本が完成するため、「全員集合」本番当日の朝まで徹夜で作業することも多かった。息子のたかしまかんたさん提供

のインタビューの折に語った。

哀愁に満ちた日本古来の旋法と、強いバックビートを利かせた最先端のポップスのリズム。全く異質な文化を掛け合わせた「盆回り」は、一度聴いたら二度と忘れられないインパクトを携えた。

1960年代以降のポップカルチャーを全身に浴びて育った著述家の湯山玲子(59)は「盆回り」しかり、ヒゲダンスしかり、改めて考えると『全員集合』は本場のソウルダンスを生放送でやっていたわけ、これは本当にすごいことだったと思う。いま聴いても、70年代当時のポップスの響きがきらきらとこぼれだしてくる」と語る。

理解者は、いつの時代も子供たちだった。ドラムロールとともにコントの終わりが告げられ、大がかりな舞台装置を載せた床が回り、スタッフ走り回って小道具を片付ける。その喧噪の光景とともに、たかしまの音楽は子供たちの無意識にしっかりと刻まれた。

「僕は知らなかったんだけど、あの音楽、子供たちの間では『お掃除音楽』って呼ばれてたらしい。幼稚園の先生から『お掃除の時間にあれを流すと、子どもたちが張り切って早く片付けてくれるので助かる』ってお礼を言われちゃってね」と肩をすくめたたかしまの表情は、心底うれしそうだった。

敬称略(編集委員・吉田純子)

「ヒゲダンス」のテーマ曲のオリジナルが、R&B界の寵児だったティ・ペンダーグラスの「Do Me」(1979年)であることはよく知られている。日本ではまだあまり聴かれていなかったこの曲を、「コントで使えないかな」とたかしまあきひこに相談したのは洋楽マニアの志村けんだった。

似たようなテイストで新しい曲を書いてみたものの、原曲にほれ込んでいた志村が納得しない。とはいえ、曲をそのまま使ったら著作権料が発生する。それならば、とベースラインだけ残し、エレキギターを加えてバックビートを強調することで、たかしまは「Do Me」を、よりスタイリッシュで

きっかけは志村けん



山本直純(左)とたかしまあきひこ。どの曲をどちらが書いたか分からなくなるほどの頻度で、一緒に仕事をしていた。＝たかしまかんたさん提供

引き締まった印象の楽曲へ、がりと生まれ変わらせた。「最も技術が要るのは、似て非なる曲をつくること」というのは、師の山本直純のポリシーでもあった。

たかしまは、山本のオープニングが奏でる精妙なオブリガード(対旋律)のみであることに、たかしまは「プロの技」を見たという。二つの声部が手を取り合ってスキップするかのような風情で、聴き手の脳内に生き生きとハーモニーを想起させる。クラシックの基礎をたたきこまれている人ならではの、高度な「味付け」だった。

細部まで丁寧に、本気で彫琢するからこそ、人々の無意識に深く刻まれる。一般の人が耳にする音楽をつくる時こそ手を抜くな。その山本の教えを、たかしまは片時も忘れなかった。和声法における細かい禁則すら、「スピード違反よりヤバイ」と厳密に避けた。

洗練された音楽を滑稽なパントマイムに掛け合わせ、ギャップを増幅させ、観客の想像力と笑いを何十倍にもふくらませることに成功した志村。そのプロデューサー的な音楽センスは、たかしまという最良の理解者、およびその卓越したアレンジ技術を得て、どんどん開花してゆくことになる。

敬称略(編集委員・吉田純子)

たかしまあきひこが残した「全員集合」の打ち合わせ時のメモには、「ビートルズっぽい（音楽を）」などの漠然とした指示が随所に書き込まれている。その多くが志村けんからの要望だった。

いかりや長介に憧れて弟子入りし、付き人を務めながら我が道を模索していた志村は1974年、荒井注の後任として正式に「全員集合」に加わる。自分だけがミュージシャン出身ではない。孤独とプレッシャーで張り詰めていた志村のマニアックなアイデアに、たかしまは虚心に耳を傾け、それを音にすることでサポートした。

そうして志村は数年後、「東村山音頭」で一点突破する。「ウワ

プロデューサー・志村けん

「オ！」という奇声に、子供たちは笑い転げ、音楽ファンは「本物のシャウトだ」としびれた。

「『こんな感じで』と志村さんが言い、たかしまさんが最高の形で音にする。たかしまさんの存在なくして志村さんの笑いは完成しなかった」と、構成を手がけていた放送作家の原すむは言う。



ライブで演奏するたかしまあきひこ。ドリフターズのメンバーとは晩年まで、一緒にパーベキューをしたり旅行をしたり、家族のような付き合いを続けていた＝たかしまかんたさん提供

音楽評論家の萩原健太(64)は「プロデューサー気質の強い志村さんの加入が、ドリフにとつての大きな転機となった」とみる。音楽バンドだったドリフをコント集団へと育て直したいいかりやも、もともとはジャッキー吉川との共演を皮切りに、米軍キャンプを渡り歩いた腕利きのベジストだった。

た。終戦まで禁じられていたアメリカ映画に傾倒し、音楽と笑いの化学反応である音楽コントに開眼。少年少女合唱隊のコントで、ベレー帽をかぶってピアノを弾くたかしまにエアギターで絡んでいくいかりやは、本職ならではのグループがあふれ出していた。

萩原は言う。「クレージーキャッツは専らモダンジャズで、初期のドリフもカントリーやロカビリーが中心。洋楽マニアだった志村さんの嗅覚が、ディスコ音楽、フ

（編集委員・吉田純子）

トで笑わせてきたいかりやの体感

が、「全員集合」の礎となる。

いかりやは自伝『だめだこりゃ』（新潮文庫）で追想した。「時代をえぐるようなコントはやってこなかった。社会風刺や現代風刺は

むしろ、極力避けてきた。著名人の個人名を出して……というネタも一切やらなかった。それらは私のポリシーでもあった」

そんな「全員集合」は、想像力のたくましい子供たちの王国となる。たかしまあき

ひこによる悩ましげなピアノのイントロを受け、照明がピンクに変わり、加藤茶が「ちよっただけよ」とストリップに興じるコントに子供たちは快哉を叫び、大人たちは赤面した。

（編集委員・吉田純子）

「ちよっただけよ」も生演奏



ゲイスターズと演奏する岡本章生。「全員集合」スタート時から、ほぼずっと生演奏を担ってきた＝本人提供

ひたすら粘つくテンポを引きずり、ライブさながら吹きたいように吹いた。しかし、演奏が熱を帯びるほどに、なぜか客の笑いが大きくなっていく。「何でこんなにウケてんだろ」。バンドの前に衝立があるため、加藤が何をやっているか、岡本には全く見えていなかったのだ。

（編集委員・吉田純子）

敬称略

ドリーフの時代、その音楽

9

舞台装置よじのぼる楽員に爆笑

「8時だヨ!全員集合」の生演奏を担ったゲイスターズのリーダー、岡本章生といかりや長介にはいくつかの共通点がある。いずれも地方にいた時期にミュージシャンの仕事に憧れ、退路を断って上京したこと。米軍キャンプで最先端の洋楽を貪欲に吸収し、キャバレーやナイトクラブのハコバン(各店舗の専属バンド)を渡り歩きながら腕を磨いたこと。

木曜からの打ち合わせを受け、金曜の夜からたかしまあきひこがほぼ徹夜で楽譜を書き上げる。手元に届くのは本番直前。いつも初見である。しかし現場で鍛えられた岡本やいかりやにとって、ぶっつけ本番は日常のことだった。

ドタバタの生放送



いかりや長介さん。笑いについては鬼のような厳しさを見せたが、音楽や旅行など、こと遊びに関しては銜(てら)いのない童心を持ち続けた

コントの会議では鬼の形相を崩さぬいかりやも、岡本の前では屈託のない音楽少年の表情に戻った。ふざけて変なアレンジを仕掛けたら「おかもっちゃん、今の何? もう1回やって。それ本番で曲が切れ、放送事故になる。」

タイムキーパーの笹沢晶が、客席の最前列の譜面台に10個ほどストックプウォッチを並べ、険しい顔で舞台を睨んでいた。本番中のいかりやが調子にのってコントを引き延ばしたりすると、笹沢がぐるぐる手を振り回し「岡本さん、音!音!」と叫ぶ。笹沢はストレスで何度か胃を壊したという。

メインのコントが終わるとすぐに歌の伴奏を始めるのだが、ある時、控室でのおんぼり休憩している板につくのを忘れていた。ふと気付くと、コント終わりの盆回りの録音が流れていた。「ヤバイ!」。他の楽員たちと一目散に舞台へ。「歌手の女性が舞台に2、3歩踏み出して、『あれ、バンドいーひん(いない)』って言ったのがハッキリきこえました」。転換中の舞台装置を我先にと必死によじのぼる楽員たちが、その日一番の笑いをとった。

(編集委員・吉田純子)

ドリーフの時代、その音楽

10

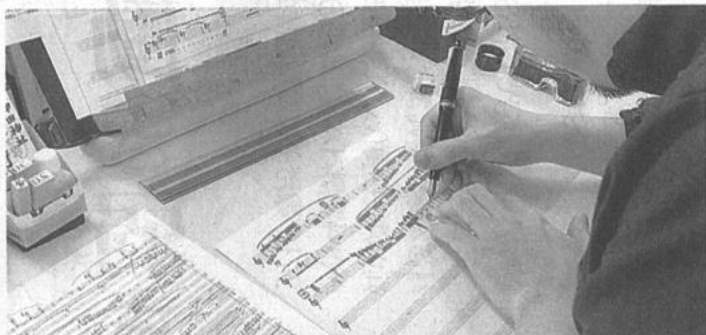
写譜の妙技 速く正しく美しく

「全員集合」の台本は、前日夜ギリギリまで固まらない。朝までにBGMやオチ音など、必要な音楽を毎回新しく書き下ろさねばならなかった。作曲家たちのこの荒業は、写譜というアナログな文化あつてこそ可能なものだった。

当時はNHKに専門の子会社があったが、業務が夕方の定時で終わってしまう。山本直純、宮川泰、服部公一ら売れっ子作曲家の泣きに添えて1973年、写譜を専門に引き受ける「東京ハッスルコピー」が誕生する。名付け親は山本。「この名前なら世界に通用するぞ!」と意気軒高だった。

会社の場所は、音楽番組の多かった東京・赤坂のTBSから徒歩

オチ音 毎回書き下ろし



写譜に求められるのは作曲家並みの読譜能力、そして丁寧でマメな性分だ。初見でも読める譜面を即座にスピーディーに仕上げていく=東京ハッスルコピー提供

1分。総譜があがるとコピーをとって、手分けして各パートを書き写す「流し」と呼ばれる作業にかかる。途中で筆跡が変わると演奏者が戸惑うため、音符同士の距離などを慎重に見極め、五線譜にのせていく。楽典の知識、読譜力、筆跡の美しさ。全てを身につけるには最低でも3年は必要だった。

多くの作曲家の譜面が力オス状態だったのに対し、山本とたかしまあきひこの鉛筆書きの譜面の美しさは格別だった。「はい、できた!」。ぼんと投げられた山本の譜面を見て、当時駆け出しの社員だった佐々木通和(61)は「基礎がある人の譜面は、音の配置がちゃんとしてるな」と感服した。

たかしまは坂本龍一(68)と同じ松本民之助に師事し、東京芸大で和声法を骨の随までたたきこまれていた。心地良い譜面に満たしたプーランクさながらのフルートソナタを書いていた俊英が、今は音の塊を壁にぶつけたようなオチ音をせつせと量産している。「なんでオレ、この世界にいるのかな」とたかしまは人懐こくこぼれたが、一流の響きを携えたアレンジがコントと現実のギャップを大きく広げ、無意識の笑いを増幅させることに、現場の誰もが敬意を払っていた。一流の職人たちの多様な技の世界に、ドリフの笑いは豊かに息づいていた。

(編集委員・吉田純子)

2020 0612

ドリーフ

の時代、
その

音楽

12/12

響きの宇宙「子供たち」が追う

2015年、自作のオペラ「竹

取物語」を日本初演した指揮者の沼尻竜典(55)は、出演した同世代の歌手たちから「これ、ドリフですよね?」と遠慮がちに突っ込まれた。桐朋学園大に学び、三善晃にアカデミックな作曲手法をたたき込まれた現代音楽界の旗手。

「子供たちにも楽しめる曲をと思つたら、ドリフになっていた!」

「女なんてだいきらい!」と叫ぶ求婚者のバリトン、晴雅彦(53)の怪しい腰つきに往年の志村けんが重なる。かぐや姫を演じた幸田浩子(48)も手慣れたコメディエンヌっぷり。「僕らの世代はドリフの文化を完全に共有している。見えないところに手をかけた

DNAは脈々と



2015年、ハノイで世界初演された「竹取物語」のエンディング。舞台美術も歌手たちの演技も、かつての「全員集合」を彷彿(ほうふつ)させた

仕事は、心に残るのですね」

日本最古級のオペラとされる北村季晴作曲「ドンブラコ」など、埋もれた楽曲の蘇演で音楽業界に刺激を与え続けるキングインターナショナルの宮山幸久プロデューサー(57)も幼いころ、「全員集合」の響きの宇宙に心を奪われた。「音楽で真剣にふさける。そうしたドリフの精神につながりたくて音楽の仕事を選びました」

番組制作を手がけるTBSスパークル社員の永野敏一(43)も、「全員集合」サウンドの鮮やかさに心を射抜かれ、スタッフロールの「たかしまあきひこ」の8文字を幼心に焼き付けた。中高の吹奏楽でも、トロンボーンや打楽器な

ど「全員集合」を彩った響きを追った。やがて自身もテレビの世界へ。作品を手がける時は、必ずたかしまに音楽を依頼した。「陽気なサウンドに隠されたペーソスに生きるこの意味を教えられ、希望を感じとる心を育てられた」

敬称略(おわり)
(編集委員・吉田純子)

ドリーフ

の時代、
その

音楽

11

弔辞のあと 一世一代のアドリブ

中南米音楽から津軽三味線、歌舞伎音楽、オーケストラ、吹奏楽、合唱まで。いかりや長介の号令で、ドリフは様々な音楽ジャンルを遊び倒していく。たかしまあきひこのアレレンジが、最先端の洋楽の香りを絶妙にまどわせた。ハイセンスな「似非」を気取りつつ、ドリフは芸術と大衆文化を本質的な部分で強く結びつけた。

著述家の湯山玲子は「日本人には『文化的鎖国』の気質がある。どんな外来文化もそのまま採り入れず、必ずアレレンジし、自分たちの文化として熟成させるようになった」と指摘する。浅草オペラや1990年代の「渋谷系」ポップスが代表例だ。「70年代の日本人

「全員集合」終幕、そして



1960年、東京・青山のクラブ。最先端の洋楽に渴望していた若者たちが詰めかけた

も、欧米から流入する文化を自分たちのものとして育て、自由にミックスした。ドリフはそんな文化の播種期の先頭を走っていた。日本中の土曜の夜を笑いのユートピアにした「全員集合」は80年代半ば、急速に斜陽へと向かってゆく。毎週分厚い台本を用意し、壮大なセットを組む努力への限界に加え、音楽業界の構造変化も遠因となった。どの世代にも楽しめる世界的なヒット曲が少なくなつた。洋楽の新譜も格段に手に入りやすくなり、かつてのような渴望の対象ではなくなった。「テレビの消化力の強さを、テレビ局の間も気づいていなかったとおもう」といかりやも自伝「だめだこ

りや」で静かに回顧した。85年、「全員集合」は幕を閉じる。いかりやは2004年、72歳で世を去った。晩年は俳優業に新たな活路を見いだしたが、飲みながら「もう一度、音楽コントをやりてえなあ」とつぶやくこともあったという。たかしまは16年、73歳で死去。お別れ会で、高木ブーが弔辞のあと、ウクレレを手に「千の風になって」を歌った。柔らかな抜ける美しい高音に誰もが驚いたが、一番驚いたのは主催者と家族だった。もともと予定されていたからだ。台本に忠実に、という「全員集合」の掟を破る、一世一代のアドリブだった。

敬称略(編集委員・吉田純子)